

# 佐賀県立博物館報

No.31

佐賀市城内1丁目15番23号 TEL 0952(4)3947



柿右衛門系  
染錦菊牡丹図細口瓶

(高さ23.5cm)

柿右衛門様式のこの種の瓶は一対製作され、主として17世紀末前後の焼成品であってオランダ連合東印度会社をとおして、ヨーロッパに輸出された。これと同様式、同形状に近い細口瓶が、現在ドイツ民主共和国ドレスデン国立美術館にも収蔵されている。本品は特に、繊細な造形感覚が豊に表現され、八角形の面取りの細口の瓶の形状は優雅であり、色絵付の運筆も固着することなく優美で、類品を抜く安定した優品である。

本品は、英國の著名なコレクター、デラアメヤー氏の旧蔵品であって、昨年1月上旬に現地で収集された。

## 目次

・柿右衛門系 染錦菊牡丹図細口瓶	1
・柿右衛門展の紹介	2・3
・佐賀県出土の曾畠系土器	4~7
・博物館日誌・行事のお知らせ	8

## 柿右衛門展の紹介

### 日本赤絵磁器のふるさと 「柿右衛門名品展」

■期　日	昭和51年8月29日（日）～9月26日（日）（9月18日休館）	
■会　場	佐賀県立博物館	
■主　催	佐賀県・佐賀県教育委員会・佐賀県立博物館・朝日新聞社	
■後　援	有田町・有田町教育委員会・佐賀市・佐賀市教育委員会・佐賀県陶芸協会	
■観　覧　料	個　人	團　体
	大人	300円
	大・高生	200円
	中・小生	100円
■図　録	2000円（予定）	

#### 1. 展示内容

佐賀県の有田は、日本の磁器のふるさとであり、赤絵の創成の地として国内外で大きく注目されています。この「柿右衛門名品展」は江戸前期に色絵の技術を中国から導入し、江戸全期を経て、現代まで伝承されている柿右衛門にゆかりの深い名品、名器を中心に展示し、また、日本の色絵磁器の発達のあとを学ぶ歴史資料もあわせて展示します。

・名品類 147点

・関連資料 20点

#### 2. その意義と開催意図

平和な近世時代は幕藩体制が整い、諸国諸領内では特長のある工業資源を活用し、殖産業を振興し藩政と結び保護奨励した。なかでも肥前の佐賀藩は、磁器の原料である陶石の礎床が西肥前の有田郷内で発見されると、いち早く磁器の生産に注目した。江戸前期の寛永末年頃には、高い商品性を保ち、幅のある市場性をそえ多品種に及びその意匠、形状は多様に展開した。

なかでも寛永末年から正保三年前後には酒井田喜三右衛門（後の初代 柿右衛門）の窯場で、本格的な色絵磁器が完成されたと伝えられる程に、江戸時代の工芸品として肥前磁器は脚光をあびた。特に古伊万里様式・柿右衛門様式・鍋島様式といった意匠、絵模様上の様式が伝統となって前近代的な産業組織の中で主として有田皿山で量産された。その製品は、国内はいうまでもなく、オランダ連合東印度会社などによって遠く海外に交易された。

柿右衛門様式の製品は、江戸前期には中国明末清初の一連の磁器様式をまとめて反映した染付、色絵磁器であったが、江戸中期には江戸初期の狩野派、土佐派、四條派などの絵画様式を磁器の画題として模様化し、日本のな格調の高い特色ある色絵磁器として完成され、ことに当時のヨーロッパの東洋陶磁趣味の流行にこたえた注文生産を行なった。その結果として商品性を加味した装飾

性の強い絵模様が付加され、また土型を利用して同一の意匠形状の器類をある程度量産化するまでに需要があり江戸後期に入ると海路交通の発達によって日本国内の需要が高まっていった。

したがって本展は、江戸時代の柿右衛門窯、あるいは傍系の窯場で造られた柿右衛門様式を中心に、一連の肥前磁器を一堂に収集し文化史的な角度から、あるいは美術工芸史の角度から鑑賞出来る企画展である。



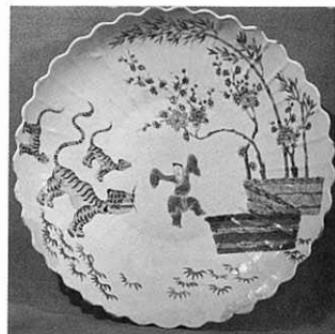
柿右衛門初期、色絵草花文瓶  
(高さ27cm)



色絵柴垣野菊文銚子（高さ19.1cm）江戸中期



牡丹野バラ図筒形瓶（高さ26.4cm）江戸前期



中国做製彩絵竹梅文唐人踊り虎図皿  
(径25cm)  
(高台底径13cm) (高さ 5.2cm)

## 佐賀県出土の曾畠系土器

九州における縄文時代前期の標準的な土器形式のひとつである曾畠系土器は、幾何学的な文様と特異な製作技術、さらには朝鮮半島にもその分布図を有するという特色をもち、朝鮮半島に近接する佐賀県におけるその出土が注目される。

戰後における曾畠系土器の研究の推移は、当初、西唐津海底遺跡の採集品が、幾何学的な文様を有するところから、朝鮮半島に分布の主体をなす、櫛目文土器文化の一群ではないかという問題提起がなされた。（「佐賀県唐津市西唐津海底遺跡」松尾賛作、日本考古学年報4、昭和30年12月）。

さらに、同じ海底遺跡の発掘調査から、施文方法の解明と編年の位置づけの試論が述べられ（「曾畠式土器に対する一考察」坂田邦洋、九州考古学22、昭和39年4月）この試論に対し、今までの研究史と遺跡の調査結果にもとづき、曾畠式土器論が発表された。

（「曾畠式土器論考」杉村彰一、九州考古学24、昭和40年3月）

県内における曾畠系土器の研究は、出土が濃密な県西部の唐津・伊万里地方にその主体があり、前記の西唐津海底遺跡と同様な地理的条件に、金剛島遺跡が存在する。両遺跡ともに海面下もしくは海辺にある遺跡で、もっと多くの曾畠系土器を出土する。

両遺跡出土の土器は、そのほとんどに滑石粉末を多量に混入し、文様は2本以上の歯をもつ施文具によって施文

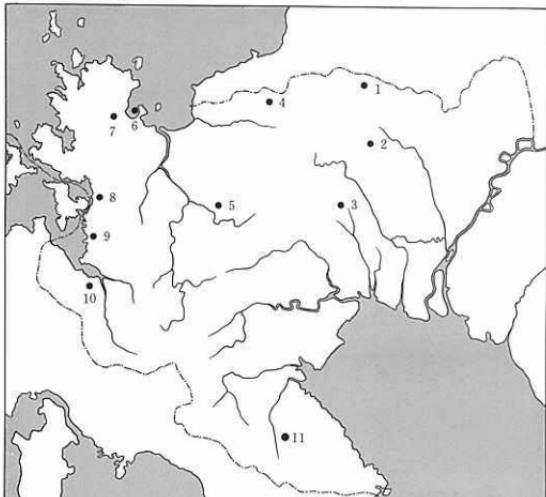
され、直線を主体とした幾何学的な文様である。中には口縁上部に列点文を施し、その下部に細直線による沈線文を施してある土器も出土している。また、櫛歯状の施文具を口縁に押圧し文様を施文したり、裏面口縁部に列点文・短沈線文を有する特色をもつ。曲線を有する土器片は見当らない。

両者を比較した場合、金剛島遺跡出土の曾畠系土器は文様にややくずれを生じており、西唐津海底遺跡出土の曾畠系土器はより正確な文様である。西唐津海底遺跡出土の曾畠系土器は縄文時代早期に位置づけられる階層文や瓜形文・貝殻押圧文等の文様を有する土器群と共に採集されている。

山間部の主な遺跡に竜王・白蛇山岩陰（図4・8～10）大門（図4・1～7）・千束遺跡（図4・11～14）等があり、前記二遺跡に比較すると出土量は少ないが、文様や器形・胎土に滑石粉末を混入することには大差がない。しかし、白蛇山岩陰・竜王遺跡では層位的な出土をしており、白蛇山岩陰遺跡では早期の土器群とは完全に分離して出土し、竜王遺跡においては、上位層より阿高系土器→曾畠系土器→押型文系土器・繩系土器という編年が試みられる。大門遺跡の曾畠系土器も単独出土であり、他の文様を有する土器とは共伴しない。

このように、曾畠系土器は胎土に多量の滑石粉末を混入し、幾何学的な文様構成で、前期に位置づけられる土器群であるが、今後確実な層位的な出土と、分布図の解明を試みることにより、九州における縄文時代前期の全像を把握することが望まれる。※西唐津海底遺跡出土資料は松岡史氏（福岡県文化課勤務）提供である。

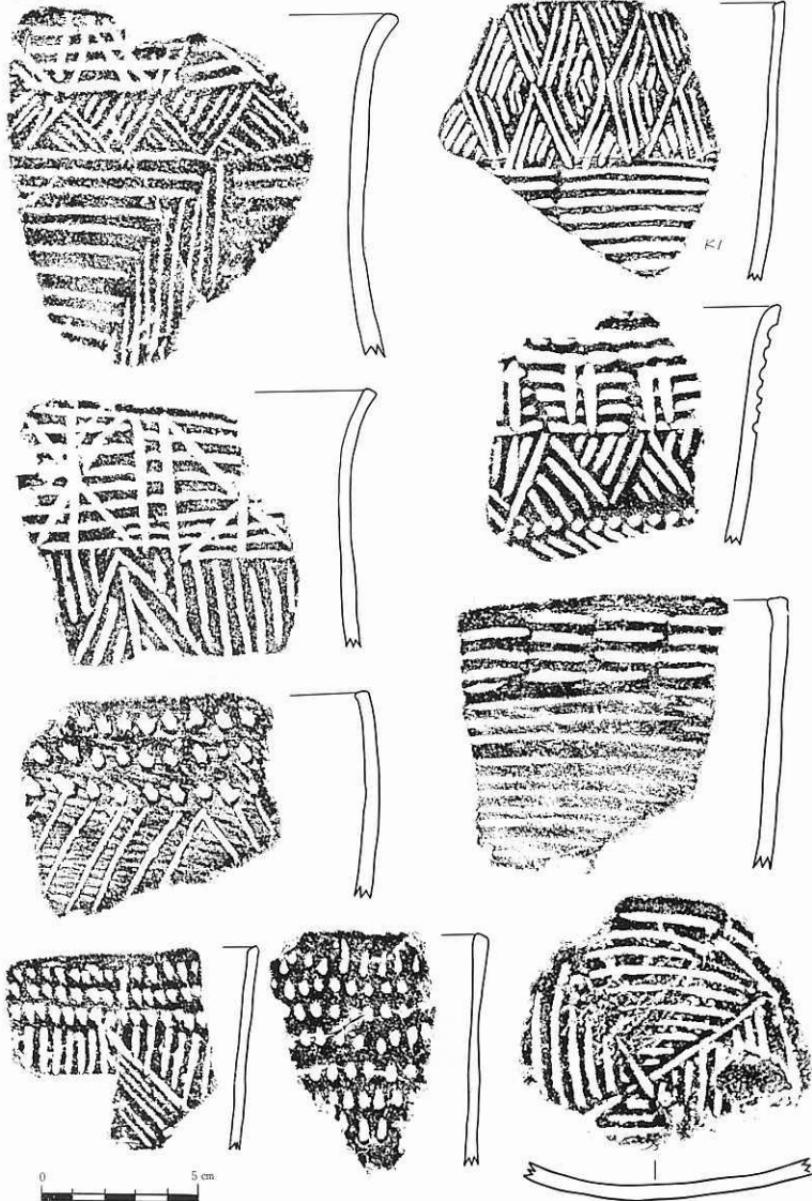
（学芸課 森 醇一郎）



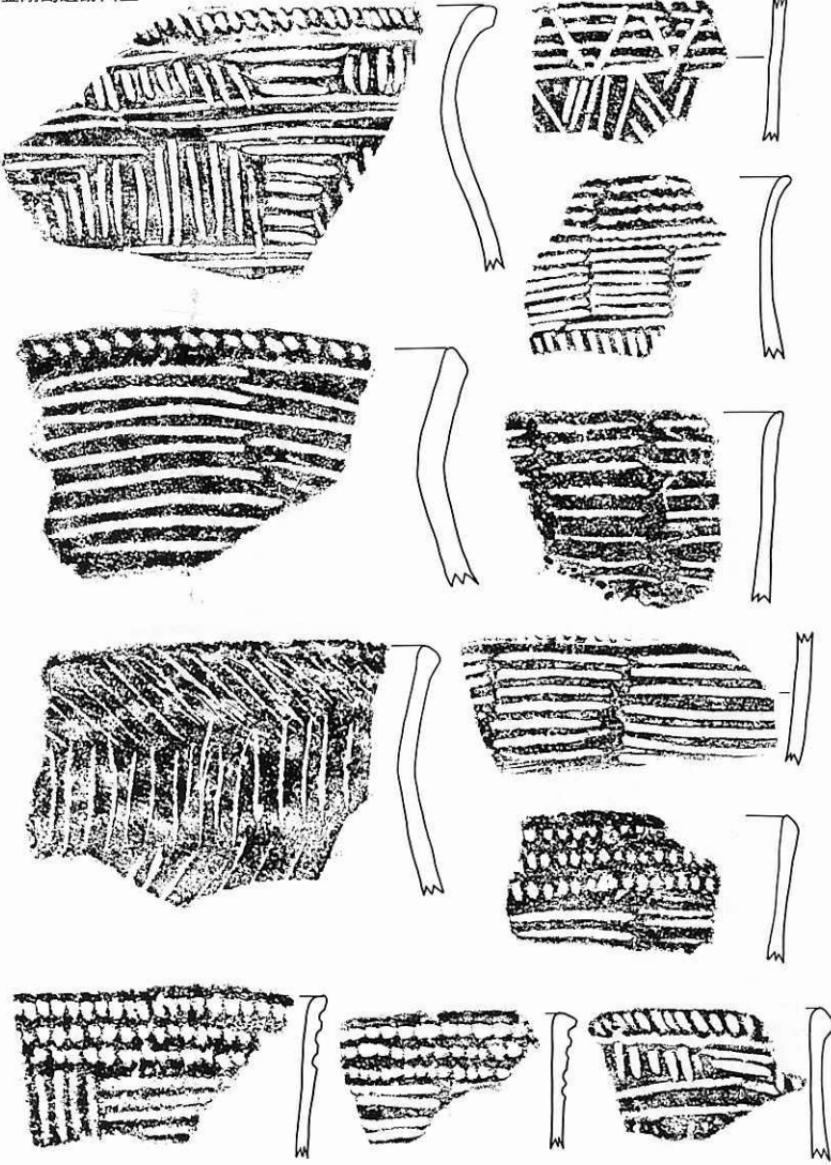
### 曾畠系土器出土主要遺跡

- |            |        |
|------------|--------|
| 1 宿北方遺跡    | (三瀬村)  |
| 2 大門遺跡     | (佐賀市)  |
| 3 竜王遺跡     | (三日月町) |
| 4 荒川峠遺跡    | (七山村)  |
| 5 千束遺跡     | (相知町)  |
| 6 西唐津海底遺跡  | (唐津市)  |
| 7 笹の尾遺跡    | (唐津市)  |
| 8 筒井遺跡     | (伊万里市) |
| 9 金剛島遺跡    | (伊万里市) |
| 10 白蛇山岩陰遺跡 | (伊万里市) |
| 11 儀助平洞穴遺跡 | (鹿島市)  |

西唐津海底遺跡出土

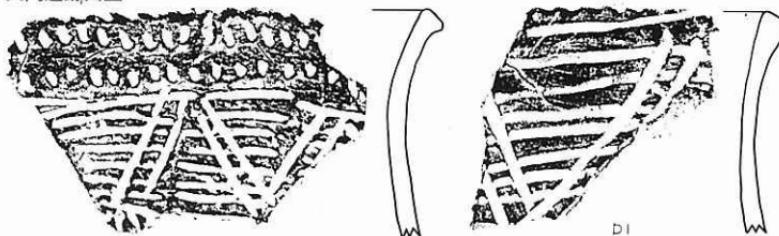


金剛島遺跡出土



0 5 cm

大門遺跡出土



白蛇山岩陰遺跡出土



千束遺跡出土



0 5 cm

## 博物館日誌

4月25日	「岡田三郎助素描展」(常設展と併設) 開場	6月6日	「日本伝統工芸秀作展」終了(総観覧者 数6025名)
4月26日	国体芸術展協議会	6月16日	「佐賀美術協会展」開場
5月1日	人事異動	6月20日	「佐賀美術協会展」終了(総観覧者数 2076名)
5月5日	「こどもの日」のため常設展無料公開	6月22日	福岡県教育庁文化課職員来館
5月9日	「岡田三郎助素描展」終了	6月28日	伊万里市教育長藤本満東氏、社会教育課 長日高昇氏来館
5月23日	「日本伝統工芸秀作展」開場 記念講演会「手仕事と現代」 講師 武蔵野大学教授 水尾比呂志氏		

## ●行事のお知らせ

修学旅行等の計画に博物館の見学を折込んで下さい。

常 設 展			
佐賀県の歴史と文化展	4月1日～8月15日 52年 12月5日～2月24日	大人 50(30) 大・高生 30(20) 中・小生 20(10)	佐賀県の地質や自然および先史時代から、現代にいたる歴史と文化についての、理解を深めるために自然史、歴史、美術工芸の各部門について、系統的に資料を展観する。

(月曜・祝日の翌日休館) 団体は20名以上 ( ) 内は団体料金

お も な 企 画 展			
展覧会名	会 期	観 覧 料 ( ) 内は団体料金	備 考
柿右衛門名品展	8月29日～9月26日 (但し9月18日休館)	大人 300(250) 大・高生 200(80) 中・小生 100(50)	本展の有りは日本赤絵のまるきことあり、赤絵の削成の如きとして、国の内外で大きく注目されている。この展覧会は江戸時代から現代に至る柿右衛門にゆかりの深い名品、名器を中心的に展観する。また、日本赤絵磁器の発達のあとを探る歴史資料もあわせて展示し、日本陶芸史と東西美術交流史の上で、柿右衛門様式とその技法が果した業績をふりかえるものである。
肥前歴史の旅 佐賀400年をたずねて (第1部) 現代佐賀美術秀作展 (第2部) (若狭国体芸術展)	10月10日～11月8日	無 料	第1部門「肥前歴史の旅—佐賀400年をたずねては、竈造寺降信時代から幕末維新にいたる主なる肥前の藩政と人物及びその文化を紹介し、日本の歴史に果した佐賀の役割を追求する。 第2部門「現代佐賀美術秀作展」は各美術部門にわたって現代活躍中の作家の秀作約100点を収録し、佐賀の現代作家を紹介する。
九州の原始文様展	1月15日～2月24日 月曜・祝日の翌日休館	大人 200(150) 大・高生 150(80) 中・小生 100(40)	粘土を焼成することにより、「器」という生活利便の製作技術を学びとった縄文時代人は、また平坦な器面に幾種類かの文様を描くことにより、美意識の表現を試みたのである。 当館では、過去の基礎調査資料をもとに、九州の縄文式文様の集成をおこなうことにより、各時代の文様変遷の集成、編年の確立と美意識の解明・文化交流の如き、土器の科学的分析を試みることにより、当時の土器製作技術を解明し、現代陶磁器の原点ともいるべき、縄文式土器の総合的な究明を試みる。
肥前の近代絵画展	3月5日～3月30日 会 期 中 無 休	大人 250(200) 大・高生 150(80) 中・小生 100(40)	桃山期から江戸末期に至る、肥前を中心とした近世絵画の優品を展観する。 内容は主に鍋島本瀧、蓮池瀧、小城瀧、鹿島瀧、武雄瀧、多久瀧や、唐津の小笠原瀧の御抱絵師並びに文人画派、写生画派、洋風画派等の作品(伊藤風、穂、頼、鉢、掛幅、帖他)であって、肥前における近代絵画の系譜を明らかにする展示である。

## ◎人事異動

- 5月1日付
- 退職  
総務課庶務係主事 中村やす
- 転入  
総務課庶務係主事 松永豊子  
(佐賀土木事務所より)

博物館報	第 31 号
発行年月日	昭和 51 年 8 月 1 日
編 集	大 園 弘
発 行	佐賀市城内 1 丁目 15~23 佐賀県立博物館
印 刷	日之出印刷株式会社